杖

2月24日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

2月24日のおはなし「杖」

　上手に使えるようになると、もう、ただの棒ではなくなった。

　最初はただのまっすぐな堅い木の棒に過ぎなかった。わたしはそれを身を支える道具として使った。右脚の膝から下が失われてしまったので、足の代わりが必要だったのだ。そのうち、腕や胸の力がついて来て、また、左脚一本でバランスを取るコツがつかめて来て、自分でも予想しないほど上手に歩けるようになって来た。そうなると、まっすぐな木の棒はもっといろいろな目的に使えるようになってきた。

　高い木の実を落とす。川の深さを測る。いきなり水に呑み込まれないように川底を探る。時には水面に浮かべて浮きとして使うこともある。急斜面の上り下りではもちろん欠かせない。穴を掘るときにも役に立つ。一度などは船をこぐ真似事もしたことがある。船なんてものはないのだが、木を組んでいかだのようなものをつくり、川下りをしたのだ。男たちに襲われ犯されそうになった時には護身の役に立った。片足の女だと思って見くびっていたのか、瞬間的に2人の脳天を叩き割った膂力を見て、男たちはすぐに逃げ出した。何度も同じような目に合って、わたしも戦い方を身につけたのだ。

　この杖とともにわたしは、かつて「東京」と呼ばれたこの都市を歩き回った。完全に塩水にやられた地域を除けば、いまは完全に緑に覆われてしまった森のあちこちに、いまでもくっきりと当時の「記憶」を残す遺跡がある。わたしはそれらのものに触れ、はるか千年も二千年も昔の人々の記憶を追体験する。夥しい住居があるらしいのに、道端で雨風にさらされて暮らした人々もいる。神話かつくり話ではないかと思えるほど豪奢を究めた暮らしをする人々がいる。「記憶」に触れるとわたしはまるで彼らがまだ目の前にいるかのように感じ取ることができる。

　いまわたしは「東京」の中心に暮らしている。ここは都市が滅亡するよりも前から森になっていた不思議な場所だ。「東京」の人たちは森を信仰していたのだろうか。二千年の昔、河口付近の高台に「江戸」と名乗る豪族の屋敷が築かれ、やがて台地の上の城が築かれ、台地のふもとを流れる川は堀へと形を変えていく。城そのものが一個の都市だと言ってもいいような想像を絶する巨大な建築がつくられ江戸城と呼ばれた。けれどもその城主一族は城を明け渡し、西の方から皇帝がやって来て今度は「皇居」と呼ばれることになった。皇帝が力を失ったあとも、その一族はここにとどまり、崇拝と非難を一身に引き受ける極めて不可思議な生活を長く営むことになる。

　それはわたしが東京のあちこちで「記憶」を通じて触れて来た生活とはまったく異なるものだった。外の人間の多くは、その暮らしぶりの過剰さを除けば、わたしにも理解できることが多かった。彼らは何かを欲しがり、何かを手に入れ、何かを諦め、喜んだり悲しんだりしていた。でもここ皇居の人間は何かを欲しいと思ってもそれを素直に表現することは許されず、何かを手に入れるにはさまざまな手続きが必要だった。諦める自由すらなかった。喜怒哀楽を表現することもあまり望ましくないとされていた。広々とした緑豊かな土地と、広大な建築に住みながら、彼らは監禁された囚人も同然だった。

　わたしは知っている。ここの住人たちにとって「皇居から見える東京タワー」という言葉が一種のジョークになっていたことを。それはつまり、響きはいいが無意味な言葉を意味していた。誰かが「夏休みの計画でも立てようか」と皮肉たっぷりに言う。なぜなら彼らには「夏休み」という猛烈に暑い時期に仕事を休む期間の計画を立てる権利などないからだ。家族の他の誰かの機嫌が良ければ「たまには東京観光はどうだろう。皇居から見える東京タワーは抜群の景色だからね」などと応じる。そして彼らの中の一人が窓の外を見る。かつて東京タワーが見えた方角を見る。

　そこには四角く壁のように見える2棟の建物が聳えていて、東京タワーは尖塔部すら見えない。左のビルには文部科学省と会計検査院が入っている。右のビルには金融庁が入っている。2つのビ

ルが2枚の壁として東京タワーを隠している。そこには何の寓意もない。教育政策と経済政策が、響きはいいが内容のないことを繰り返して、見通しを失ったなどとこじつけるつもりはない。ただ単に、以前は見えたものが見えなくなった。巨大都市ではよくあることだ。たまたまそれが皇居と、東京タワーという、ある時代、この都市のシンボルだった者達を分断してしまったというだけのことだ。

　今はもう、それらの建築物を見ることはできない。皇居はあちこちに江戸城の石垣跡が残っているが、建物そのものは跡形もない。東京タワーも見る限り何も残っていない。でも東京タワーがどこにあったのかわたしは知っているし、かつてそれがどのように見えたのか、景色を遮った建物はどう見えたのかもほぼわかっている。そこには大した意味もないのだろうけれど、お気に入りの景色が見えなくなるのは寂しいことだと思う。まして、それがこの都市が滅亡に向かう最大の動機になったとあっては。

　わたしはいま、ここに畑を作れるのではないかと考えて、挑戦している。幸いなことにここには多くの食用植物が自生している。かつて同じようなことをしていた人がここにいたということだろう。農工具としても杖は役に立ってくれている。杖は大切な相棒だ。けれどもそろそろ、誰か、一緒に畑を耕す仲間が欲しくもなっている。家族をつくるというアイデアは無意味だろうか？　「皇居から見える東京タワー」だろうか？　2枚壁のビルがなくなった今なら、その呪いはもう解かれたと思っていいのではなかろうか。

（「皇居から見える東京タワー」ordered by ariestom-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro）

●「SFPインデックス」

感謝の言葉と、お願い＆お誘い

　Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？　もしも気に入っていただけたならぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブクログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

　「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそこのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

　現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→公開中の作品一覧

　SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「Sudden Fiction Project Guide」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

　ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、Facebookページなどに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

　読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

　10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「急募！お題　この秋Sudden Fiction Project開催します」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！　はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

　こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひご一緒に盛り上がってまいりましょう。

杖

http://p.booklog.jp/book/44781

著者：hirotakashina
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/44781

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/44781

公開中のSudden Fiction Project作品一覧
http://p.booklog.jp/users/hirotakashina

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.